The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	書道と學問
Author(s)	岡山, 源六
Citation	懐徳. 1936, 14, p. 52-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88951
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書道と學問

岡山源六口述

先づ書道の盛衰に就て、極く大體の事を申し上げます。

書道は近年盛んになつて行く傾向になりましたので、誠に結構な事と存じます。西洋の學問や藝術思想といつたものが這入りまして、それが勢づいて以來彼是六七十年になりませうが、此の西洋文明に押されて眞先に衰へたものは、從來勢を振つて居た漢學でございます。漢學が衰へましたので、漢詩や漢文の藝術も次第に衰へて、作者も次第に少くなり、今日では曉け方に星を見るやうに甚だ淋しくなつて居ります。是まで永い間東洋思想を支配して居た漢學が既に衰へましたので、これと切つても切れない密接な關係にありました書道は、影も形もなく、自分の住居でありながら人に取られてしまつて、自分は住むにも住む所がなくなつたやうに、甚だ憐むべき狀態に衰微したのでございます。併しながら西洋文明も能く味つて見ると、都てが都て感心すべきものでないことが段々分るやうになり、また日本の國が全面的に西洋の色に染つたら、やがて滅亡を免がれないことが心配になつて參りました爲に、日本精神を發揮せよ、東洋の藝術を尊重せよ、東洋の學問を復興せよ、斯ういふ聲が何

處からともなく起るやうになりました。それが書道に影響を及ぼしまして、一旦衰へたものが又盛んになつて行く氣運を表はしつゝあるのでございます。けれども書道に密接な關係のある漢學は、まだ錆びついて居て、光が出ずに居りますが、是は日本精神、東洋思想を尊重し、且つそれを維持して行く上に大切な學問でございますから、是から盛になるとも、更に衰へることはない譯でございます。是から書と畫との關係を申し上げます。

凡そ普通の場合に於て、書を書くといふ事は、其の書が一定の形になつて居りますから、其の形を書くといふ事でございます。それで書を書くといふ事は、詰り畫を書くといふ事と大體同じ事でございます。昔の人に畫を讀むといふ言葉がございます。畫を讀むとは畫を品評する意味でございますけれども、何だか變な感じが致します。けれども書は畫であり、畫は書であるといふ事に氣がついて見れば、畫を讀むとは書を讀む卽ち字を讀む事だと了解が出來るのでございます。支那の漢の世の揚子雲といふ人が、書は心の畫であると申して居ります。書は其の形を書くのだと考へたら、目で見た書を心で見れば畫であり、目で見た畫を心で見れば書でございます。要するに書と畫とは裏と表との相違で、物その物は同じ物で、それに疑ふべき餘地は少しもございませぬ。處が近頃の南畫に、題賛のあるのを能く見ます。成程畫は好く書いてございますが、書が不味い爲に、折角よく書けた畫も傷物になつて居ります。題賛は重に畫の足りない所を補ふ爲のものでございます。譬へば芭蕉の畫をかい

て、夜來風雨ノ聲と題賛したら、芭蕉だけの畫でも、雨に打たれ風に搖られて居る有樣が、畫に浮んで見えます。是は書が畫であり、畫が書であることを聯想した感じの印象でございます。それ故に畫をかく人でも、書道に熟達しないで題賛などを致しまするとと、其の畫は未成品だと言はれても已むを得ませぬ。次に書の上に現はれた氣韻の事を申し上げます。

書は形を旨く書く事だけが藝術ではございませぬ。形に氣韻がなければ平凡になつて、サッパリ面白味がございませぬ。顏眞卿を眞似て俗字になり、山谷、東坡を眞似て癖が出來ます所以は、氣韻の乏しい爲に目立つのでございます。故に書道は何といつても氣韻が眼目でございます。さて氣韻とは何ぞやと申しますれば、口で言へず筆で書けず、目で見て心に悟るより外はございませぬ。例へば物の白い赤い黑いは、目では一見して解りますが、說明は困難であると同じ事でございます。併し强いて申しますなれば、垢が取れて俗な氣がなく、一種の美感と一種の雅味のあるもの、それが氣韻でございます。其の氣韻は墨によつても現はれ、筆によつても現はれ、また自分の意識によつても現はれ、其の反對に無意識によつても現はれます。最も高い氣韻は無意識から現はれ、其の次の氣韻は意識から現はれ、また其の次の氣韻は筆から現はれ、最後の卑い氣韻は墨から現はれます。墨から現はれた氣韻は、墨色の濃淡が工合よく出て居る事を感ずる美しさでございます。筆から現はれた氣韻は、筆勢が巧妙に運ばれて居る事を感ずる美しさでございます。意識から現はれる氣韻は、かやうに書かう

と思つて、かやうに書けたもの、即ち思つた通りに書けたものに感ずる美しさでございます。無意識から現はれる氣韻は、かう書かうとは思はないのに、かう能く書けたが、それでも何だか足りないやうでもあり足つて居るやうでもある、だが此の上は如何することも出來ない、人の藝を超越して天の藝であると感ずる美しさでございます。然らば墨から筆、筆から意識、意識から無意識に氣韻を高めて行くについて少し説明致します。

書は何と云つても自分の書を自分で旨く書くのが書道の極致でございます。それ迄になるには、初めに大家の書を習つて、それを眞似ることが第一の要義でございます。それで其の人の書を寸毫も違はずに眞似ることが出來たら、先づ素人の上達したものでございます。併し如何によく王羲之を眞似た所で、如何によく顏眞卿を眞似た所で、それは王羲之の書であり顏眞卿の書であつて、自分の書ではございませぬ。自分の書となるには、自分の個性が出なければなりませぬ。個性を出す法としては、一人の大家を目當とせずに、多くの大家を相手として、何れも是れも習つて見る事でございます。けれども一つ〳〵筆を執つて習ふ事を言ふのではございませぬ。王羲之が言つた通り、意は筆の先きに在りで、頭に入れて頭で書く、それを自分の個性で味ふ事でございます。さう云ふ方法で、多くの人の書を頭で習ふ内に、自分の個性でそれを融合陶冶して、遂には個性のある自分の書となるのでございます。清朝の王麓臺と云ふ人は、其の畫に就て斯んな事を申して居ります。古人の法でもなければ

自分の手でもない、それかと云つて古人の法がないでもない、また自分の手でないこともない、と申して居ります。書道に於ても熟達すればさうなる事は當然でございます。大體素人は、誰の書風は好き、誰の書風は嫌いと能く申しますが、書は人の顏形が違つて居るやうに、一人々々が皆違つて居ります。それで好き不好は一應當然の事のやうに思ひますが、併し人間は顏ばかりで好き不好は決められませぬ、大部分は其の人の性格で決ります。書も全く其の通りで、形ばかりに囚はれずに、氣韻の高い卑いを味つて見て、然る後好き不好を決める事が出來るやうにならなければなりませぬ。今申し上げた氣韻の高い卑いは、人格の高い卑いと相伴ふ事は、影の形に從ふやうになつて居ります。人格が高ければ氣韻が高く、從つて其の書は宜しいと云ふ事になります。唐の穆宗皇帝が、柳公權に書を書く道を聞かれた事がございます。丁度其の頃穆宗皇帝は、酒や色に心を寄せられ、政事の方が怠り勝になり、左右の大臣等が心配して居た時でございますから、柳公權は心正則筆正と申し上げました。世に之を筆諫と稱して居ります。書と人格との關係は、全く此の通りでございます。心が正しくなければ、書いた書も正しくございませぬ。試に支那の書家を見ても分ります。晉唐から明清まで凡そ一千六百年の間には、多くの書家が出て居りますが、今日其の書の傳はつて居りますものは人格の高い人のもので、人格の卑い惡劣な人の書は、傳はつて居りませぬ。然らば人格を高める爲に人格を修養する學問の必要なる事は、申すまでもない事でございます。只今日本の書道は盛んになりかけては居

りますが、遺憾ながら學問が伴はない。支那の書家と云はれる程の人で、學問のない人は昔から今日まで一人もございませぬ。勿論淺い深いはありますが、淺いと云つても經史百家の書に目を通さない人はありませぬ。孔子は道に志し藝に游ぶと申して居ります。支那の書家は悉く孔子の此の言葉に當嵌る人で、日本の人のやうに學問なしに書道を專門として居る人はございませぬ。書道は寧ろ學問の餘技であると見て居ります。さりながら學問によつて人格を高め、人格によつて氣韻を高めた書でございますから、甚だ尊重されて、一字千金の價があるのでございます。日本の現在の人の書は、形のみに囚はれ、氣韻は墨と筆とのみによつて現はれ、學問から得た氣韻がございませぬ。それで一かどの書家である積りで支那に行きますと、日本の看板書きが來たといつて相手になつて呉れませぬ。これでは書を書くどころではない、耻をかきに行くやうなものでございます。せめて漢詩漢文を一通り作れる學問があつたら、喜んで迎へる事でございます。一體人格を修養する學問と申しましたら、何處の國々も是に要する備はつた經典があります。だが併し書道に親しむ人の必要とする學問は、書道と深い關係のある漢學を修める事が、最も當を得たものでございます。併し漢學と云つても、其の範圍は極めて浩繁に渉つて居りますから、論語、孟子、詩經の如き日常の生活思想の根柢をなすものを修め、また風雅風流の道は、これも書道と至つて深い關係がありますから、支那の古人の詩文を學んで、一通り作る事でございます。さうしたら人格の高まる結果として、人の迹を追ひ人の書ばかり眞

似ては居れなくなります。そこで墨と筆とによつて現はれる氣韻が、更に意識によつても現はれて參ります。是れまで人の書を書いて、代書の役を務めて居りましたものが、今度は自分に自分の書が書けるやうになります。またモツと學問を進めて、老子の學を修めたなれば、書道も更に進んで、氣韻は最も高いとする無意識によつて現はれるやうになります。老子の學は、人生哲學の最高權威でございます。其の學問の根本義は虛無淸靜にして、無爲に化すると云ふ事でございます。卽ち人間は其の精神が淸淨無垢で、厭な雜念が去つて空になり、氣が靜かに落着いて居れば、私利私欲に涉る事を爲さなくなると云ふ事で、自然の人間となり神ながらの人間となり、極めて高い人格の人間となると云ふ事でございます。書道に於て此の根本義を體得したら、俗受けの書を書いて人氣を取る事に汲々として、利欲に走る心が無くなり、爲さうと云ふ野心を出さずに爲す事になります。そこに自然は人間であり、人間は自然である性格美の存在を認めるやうになつて參ります。人氣を取らねば生活の道が塞がると思ふ人もありませうが、老子の道は、招かずとも自然に來る、求めずとも自然に得られる、といふ事に在ります。書道も斯う書かうと思はずに斯う能く書けたとなれば、垢が取れて俗な所がなくなり、崇高な氣韻が現はれて參ります。さうなれば世の中の人氣は自然に集まつて參りますに因つて、生活の道が塞がる事は斷じてございませぬ。世には孔子孟子の道さへ行はれないのに、如何して老子の道が行はれるものか、と思ふ人もありませう。それは行はないから行はれないので、味つて見

て少しでも體得したなれば、少しでも行はれる道でございます。取分けて書道に親しむ人には、斯の道が尤も必要缺くべからざるものと思ひます。

終りに臨んで斷つて置きます。前に幾度も漢學と申しましたが、是は日本で言ふ漢學の事で、宋學に對する漢學ではございませぬから御承知を願ひます。（終）

二十周年回顧の一端

吉田鋭雄

――開堂式と定期講演――

懷德堂重建以後、早や二十年の歲月は流れた。回顧すれば私が懷德堂勤務の辭令を受けて、始めて堂に登つた時は、開堂式を行ふ前一月、卽ち大正五年九月十五日で、講堂も事務所もたゞ外廓が出來たのみで、內部の設備着手に大混雜の最中であつた。使丁室には糟谷といふ老夫婦の小使が居るばかり、事務を執るにも紙も筆もない有樣なので、是から俄に世帶道具を買集めたり、電話や瓦斯管の敷設交涉やら、開堂式擧行の準備に、日々大多忙を極めたが、終にめでたく十月十五日盛大なる開堂式